

## TV CMに登場する「英語で輝きたい日本人女性たち」(3)

小林 葉子

### はじめに

本稿は小林(2018a, 2018b)に続く最終論文である。第一論文では「英語(圏)で生きていきたい日本女性たち」が登場する小説として、『女たちのジハード』と『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』を取り上げた(篠田 節子, 2000; 清武 英利, 2016)。第二論文の前半では、紙面の都合上のため第一論文で割愛した「日本人女性と英語」研究概観を行い、後半ではNHK連続TVドラマ「花子とアン」とNHK国際共同制作ドラマ「Oh Lucy!」を取り上げながら、「英語と日本人女性」についてさらに考察した。第二論文ではこれらの作品に登場する「英語で生きたい日本人女性たち」を次のように分類した(46ページ)：

- (1) 「英語をいかした職業」に転身することで長く日本で働き続けようとする女性たち(例：日本企業の中でのOL寿命は短いことをよく悟ったうえで、「ビジネス文書の翻訳スペシャリスト」なるという夢を目指していたが、挫折を繰り返し渡米した『女たちのジハード』の沙織；『女たちのジハード』の渡米前の蓬田)
- (2) 海外就職に活路を見いだそうとする女性たち(例：翻訳では生きていけないことを悟り、渡米して転職したが日本のOL時代と変わらない仕事をしている『女たちのジハード』の蓬田；地方出身で事務職経験ゼロながら、シンガポールへ単身渡航し、起業やさらなる転職を考えている『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』の中村咲子と佐藤敦子)
- (3) 英語を趣味として学びながら日本での生活の中で居場所を探そうとする女性たち(例：生きがいの居場所もないまま英会話学校に通い始める「Oh Lucy!」の中年独身OL・節子)

他の作品と異なり、「Oh Lucy!」には「白人英語ネイティブ男性教師」が登場し、そのジョンが節子の狂気的な愛の対象となっていく。ただ、ドラマを視聴した女性たちのコメントからも分かるように、節子を「尻軽」の「オリエンタル女」や「外国人から見ると日本人」女性イメージの「イエローキャブ」としてとらえた視聴者たちは少数派であった。多かったのは、職場にも社会にも居場所がない「アラフォー」独身女性の姿を「明日は我が身」と感じる同世代の独身女性たちからの「共感」であった。

その一方で、第二論文(小林2018)で指摘したように、「単身で日本にやってきてあやしげな英会話学校で働いているジョンについて何の説明がなくても違和感がないほど、白人男性が日本の英会話学校で働いているという状況は日本中で当たり前である」(Kobayashi, 2014)。国内外の研究者の間から向けられる視線もこうした白人男性に対してではなく、日本人女性た

ちの「欧米・白人男性好きである」というオリエンタリズム的な見方 (Kelsky, 2001; Said, 1979) が根強い。その結果、日本中の白人英語ネイティブ講師の大半が男性であり、日本人女性たちが彼らを指名しているわけではない、という議論が長いこと抜け落ちてしまっている。この議論は本稿の後半で行う。

本稿前半ではまず、イーオンとECCという大手英会話学校のTV CMに登場する「英語で輝く・輝きたい日本人女性」像を紹介する。その目的は、(1) 上記の小説とドラマの登場人物同様に、CMが描く「女性が英語で輝く」場所はあくまでも男性優位社会の邪魔にならない端であることを確認すること、(2) しかしそうした見方は浸透しておらず、「英語・欧米好き」な女性たちが好き好んで選んでいる選択だという認識が国内外で根強いことを指摘すること、である。

### TV CM 「英語で輝きたい・輝いている女性」事例

#### 「英語が好き」で「子どもが好き」な主婦とOLを応援する「浅田真央」

まず紹介するCMは、国民的スターである女子フィギュアスケート選手・浅田真央氏を起用したECCジュニアの「ホームティーチャー募集中」CMである。以下のCMは浅田氏が現役引退を発表した2017年4月直後から放送されたものであり、スーツ姿の浅田氏による「浅田真央は新しいことにチャレンジしていきます」という宣言とカメラのフラッシュは、その当時の「引退後に真央ちゃんは何をするのだろうか」という社会全体の興味が下地となっている：

1. 東京であろう街のビルの巨大スクリーンに大きく映し出されたスーツ姿の浅田真央。フラッシュを浴びながら、真正面を見据えて「浅田真央は新しいことにチャレンジしていきます」と真面目な顔で宣言。
2. その浅田は視線を眼下の交差点を渡る女性たちに移し、こう声を掛ける：「貴方は何にチャレンジしたいですか。」
3. その声を耳にした、小学生低学年らしき少女の手をひいた若い女性が顔を上げ、スクリーンの中にいる浅田に向かってこうつぶやく：「ずっとやりたかったこと。」
4. すぐに画面は切り替わり、リビングルームで掃除機をかける若い主婦が「好きな英語をいかしたい」と空(くう)をみながらつぶやく。その女性をリビングのTVに映った浅田が見つめ、笑顔で大きく数回うなずく。
5. また別のCMバージョンでは、同じく交差点を歩くパンツスーツとハイヒールという外回りの営業職らしき若い女性が浅田を見上げこうつぶやく：「ずっと夢だったな」。すぐに画面が切り替わり、会社のオフィスでスマホを片手に浅田の宣言を見ているらしきOLが空(くう)を見つめてこう続ける：「子どもと関わる仕事」。
6. 画面いっぱいにくローズアップした浅田が笑顔で一言：「その思い、かなえませんか。」
7. 「ホームティーチャー募集中」の画面のあと、浅田とその背後に並んだ若い女性たちが、「あたらしい自分へ、一歩。」という画面に映し出された大きな文字と一緒に唱えながら、明るい笑顔を浮かべて一歩前進。「ECCジュニア！」という子どもたちの元気な掛け声とともにCM終了。

「英語が好き」で「子どもが好き」な「貴方」なら、「ECCジュニア」の「ホームティー

チャー」としてもっと輝くことが出来る，というメッセージはECCが10年以上続けている決まり文句である。2008年には当時人気絶頂であった国民的男性グループSMAPの香取慎吾氏が起用され，次のようなCMを流している：

1. 画面いっぱいにくろズアップされたスーツ姿の若い香取氏が照れながら告白する：「英語が好きで子どもが好き。そんな貴方はステキです」。そう言いながら，やはり照れながら手でハートマークを作ると，そのなかに「スキ」の文字が映し出される。
2. 画面が切り替わり，まだよちよち歩きらしき男児の手をひきながら散歩道を歩く若い女性が振り返り，自分を指さしながらこう驚く：「えっ？私？」そして画面には「ステキ」の文字が写る。
3. 画面が再度香取氏のアップに切り替わり，香取氏はこうささやく「教える貴方はもっと・・・(ささやき声で)ステキです。」
4. 「ホームティーチャー募集中」の画面になり，「ホームティーチャーになりませんか」という香取氏の声。
5. 「無料説明会受付中」という画面と「ECCジュニア！」という子どもたちの掛け声とともにCM終了。

2018年8月から俳優の大谷亮平氏が新たに起用されたが，彼が視聴者に語りかけるセリフに大きな変化はない：「英語が好きで子どもが好き？」「それなら，このドアの向こうに貴方の輝ける場所がある」「(画面上の文言)それは，輝きつづけるあなたへのトビラ。」「ECCジュニアのホームティーチャーになりませんか。」「明日の貴方がきっと輝く。」なお，この「輝く場所」というフレーズはライバル企業のアルクも使っている：「わたしの輝く場所，見つけた！」(アルクの子ども英語教室ホームページ>先生たちのインタビュー 2019年3月時点)。

上記にまとめたように，若い主婦や働く女性たちは「英語が好き」で「子どもが好き」で，「輝ける場所」を探しているはずだ，と想定される。そして，彼女たちが自宅等で子ども英語教室を開講したとしても一人で生計を立てていけるような収入は見込めないのだが，そうした収入を彼女たちは必要としていない，と英語産業界はみている。ECCジュニアとアルクがそのホームページ上で紹介しているのはまさにそうした女性たちであり，英語で輝いている「先生」たちが笑顔いっぱいの写真とともに紹介されている(情報はいずれも2019年3月時点)：

ECCジュニアホームティーチャー：「子育てと両立×ホームティーチャー 子どもとの時間を大切にしたい。その上で，自分の好きなことを活かしたら・・・子育てと両立しながら活躍しているホームティーチャーをご紹介します。」「岡田先生へのインタビュー」(埼玉県谷中町1丁目教室，2014年開講，お子さん：4歳と6歳)：

「祖父と叔父が教師だった影響もあって，結婚後は自宅で英語を教えてみたいという思いを漠然と抱いていました。2人目の子どもが少し大きくなり派遣社員として社会復帰しましたが，育児や家事と両立して働くことの大変さを，日々感じていました。そんな時，以前説明会に参加したホームティーチャーのことを思い出しました。ホームティーチャーなら，自宅で育児・家事と両立しながら働けるかもしれない，そして好きなことを仕事にできるなら，私や家族にとってもプラスになるのでは，と感じホームティーチャーになることを決意しました。」

アルクの子ども英語教室：「いつかは……」と思っていても、「子育てしながらでも大丈夫?」「どんな準備をしたらいいの?」「いざ始めたらどんな感じなの?」など気になることはたくさん! 一步を踏み出した先生たちの“いま”をご紹介します。アルクKiddy CAT英語教室真岡校 山崎 郁美子先生(2013年開校, 1週間のレッスン日5日): 「約7年間務めた会社では主に給与業務に関わっていましたが、英語が大好きで独学で学習に励んできました。結婚後に退職し、友だちから子どもに英語を教えてほしいとお願いされたのをきっかけに、ボランティアで子どもたちに英語を教えるようになりました。その後、娘が通っていた幼稚園で新しい取り組みとして英語を導入したいということで、ちょうどそのとき、教室を開校したばかりだった私のところに園長先生から相談をいただきました。これをきっかけに、月に1回1時間の指導に携わっています。また、J-SHINE(小学校英語指導者)資格を取得し、今年度から小学校の外国語活動にも携わるようになりました。英会話の成果はなかなか形として見えにくいものですが、それでも日々の努力で少しずつ子どもたちは前進しています。レッスンの中ではじめて出会ったフレーズに対して一生懸命にうまく言えるよう努力し、その成果が少しずつ見えてきたときや、そこから自分の言葉として友だちと英語でコミュニケーションをとっている姿を見たとき、とても感動を覚えます。子どもたちの「英語が好き」「もっと上手になりたい」という思いに寄り添えることに対して感謝とともにやりがいを感じます。」

CMやホームページからわかるように、大手英会話産業は「結婚して専業主婦になっても、英語と子どもが好きな貴方なら輝く場所がありますよ」と声を掛けるのだが、その呼びかけから当たり前のように排除されている問いがある：なぜフルタイムで働く若い営業職や事務職の女性たちがその職を近い将来に手放すことを想定しなければならないのか、なぜ今の職場以外の場所で「輝く場所」を探さなければいけないのか、なぜその「輝く場所」では一人で生きていくだけの収入が見込めないのか、そしてそのことは問題ではないのか、という問いである。

その一方で、結婚や出産後の職場復帰が難しい日本社会の中で生きる女性たちに対し、英会話産業が家庭に入った女性たちと「社会」とつなぐ空間を提供している、という見方ももちろんできよう。特に2011年度に小学校での英語の必修化が開始される前後で、「英語が好きで、子どもが好きな」主婦たちは「児童英語教師」という選択肢に希望を見いだしている。週刊雑誌『アエラ』の特集記事「主婦英語」(福井洋平・野村昌二, 2011)によると、アルクの「小学校英語指導資格」「向けの講座受講者のほとんどは主婦」で、「資格を生かして「児童向け英語教室を開きたい」という問い合わせも、この5年間で4倍に膨れあがった」という。「以前勤めていた会社でビジネス文書の翻訳にたずさわり、3カ月の留学経験がある都内在住の主婦(40)」「子供2歳と6歳」もその一人で、「小学校英語指導資格」を取得した理由は「子どもが小学生になったら、子どもの帰宅前に仕事を終えられる」からだ」と記事はまとめている。

さらに、「ホームティーチャー」や「小学校英語指導資格」になるために必要とされる英語力は低く設定されているため、より多くの女性たちの関心を高めている結果となっている。ECCジュニア・ホームティーチャー募集のサイトには、「幼児から中学生を対象に教えるECCジュニアでは、中学3年生までの基礎的な知識があれば教員免許など特定の資格の有無は問いません。」「英語が好き、子どもが好き」という方であれば、ホームティーチャーの素養をお持ちであるとECCジュニアは考えます。」とある。

第一論文(小林2018)が取り上げた小説2作品に描かれているような「ビジネス文書の翻訳スペシャリスト」や「海外就職・海外での起業」という目標に挑戦する女性たちは少数であ

る。対照的に、「英語が好き」だが英語力は高くなく多くの若い日本人女性たちにとって、近所の子どもに指定された英語教材を使って、家事と育児の合間に「ステキ」に「輝く」自分になる、という選択肢はよほど現実的かつ魅力的であろう。なお翻訳通訳業は韓国でも女性の比率が高いが、日本とは異なり、難関の専門大学院での厳しい修学が必要となるため(Cho, 2017; 金 静愛, 2008)、OLや主婦が仕事の合間に勉強して目指すような職業とは位置づけられていない。

ここで確認したい。「英語をいかした仕事」に就きたいと思っている多くの女子生徒たちは職場で英語力を使って仕事をしたいと思っているのであり、最初から翻訳者、海外就職・海外起業、ホームティーチャーなどを希望しているのではない(Kobayashi, 2002, 2018a)。しかし「会社で英語を使って仕事をする」機会は英語が好きでなかったはずの男性社員たちに与えられてしまう(Kobayashi, 2011, 2013, 2018b)。その結果、社会人女性となった彼女たちは英会話産業が提案する、彼女たち専用の「英語との付き合い方」にシフトせざるをえないのである。つまり、一見、「英語が好き」な主婦やOLたちに「輝く場所」を提案している英会話産業は彼女たちの味方のようにも見えるが(そしてその側面はあるが)、男性優位社会構造を揺るがす心配がない場所に彼女たちを誘導している、という重大な役割を果たしていることも事実である。

そうした中、女性雑誌や英会話産業が最も盛んに奨励する社会人女性向けの英語との付き合い方が「自分磨き」のための「英会話」である(Kobayashi, 2015, 2018c)。その付き合い方を描いたイーオンの人気のCMシリーズを以下で紹介する。CMでは女性に人気がある女優・石原さとみ氏が英語を流暢に使いながら、人気の欧米の都市でまるで暮らしているかのように滞在し、「英語で、ハッピー」になって「素敵な出会い」を楽しんでいる女性を演じている。

### イーオンに登場する自由な海外滞在を楽しむ「石原さとみ」

イーオンのCMに初めて登場する数か月前の2013年6月に石原さとみ氏はイーオンでの英会話レッスンを始めている。それ以来、イーオンホームページの「さとみのレッスンレポート レッスン動画公開中！」において、レッスン動画や写真、石原氏の日記、担当トレーナーからのコメントなどが公表・更新され続けている。なお、マンツーマンのレッスンが主軸のようだが、日本人と「外国人」トレーナーによる「ダブルレッスン」も受けているようである。

当時石原氏は「CMの撮影が近いので、気合を入れていこ～！(カメラの前でもちゃんと話せますように)ドキドキとワクワクが一緒にいる感じ。」と書いている。このサイトとCMを連動させることで、英語が流暢でなくてもイーオンで日常会話レッスンを続ければ、石原氏のように欧米で地元の英語ネイティブたちと楽しく会話出来ますよ、というメッセージの説得性を高めている。話題性の面からもその広報戦略はうまくいっているようで、Googleで「石原さとみ 英語」で検索すると5百万件近くがヒットする(2018年9月14日検索):「石原さとみ、英語のCMやドラマのセリフの発音は下手?上手い?」「発音トレーナーからみた石原さとみさんの英語は?」「英語が上手いと思う芸能人、まさかの一位は「石原さとみ」」など。

石原氏が登場するイーオンCMシリーズは2019年3月時点でも続いている。なお、石原氏が地元のひと(役)としゃべっている英語のセリフは、洋画のように日本語字幕として画面に流れる。以下にこれまで放送されたCMの内容を多少の「英会話」例とともにまとめる:

#### ニューヨークシリーズ (2016年放送)

- 自転車で朝の街を散策途中で公園のベンチでひと休みをする石原氏。その横に白人のシニア

男性が座る。“Big five-O” (50歳) になる妻の誕生日祝いの料理を作るため、食料の買い出しから家に戻るところだという男性に、“Big five-O! Wow. Congratulations.”と応じる。

- カフェの入り口でメニューを眺める石原氏。白人女性ウェイトレスとお薦めメニューや天気について会話を始める。外のテラス席でつき、店員と冗談交じりで会話を楽しむ。
- 本屋に入り、石原氏は白人男性の店員に興味のある作家の作品を取ってほしいと頼む。店員がお薦めの作品を紹介する。“Excuse me. I'd like to see that book.” (Ah, which one?) “The greenish one. On the second shelf from the top.” (Of course.) “Thanks.” (Ah. Have you read much by this author? Her books are pretty intense.) “No, but I always wanted to try something by her.” (Oh, in that case, let me recommend this one instead.) “Oh, thanks. I'll give it a shot.”
- 本屋を出てストリートパフォーマンスを見る石原氏。その白人男性に“Wow! That was fantastic!”と声を掛け会話が始まる。琴を時々弾くという石原氏は相手から「琴」について聞かれ説明をする。「じゃあここで弾いたら、僕と場所の取り合いになるけどね」とジョークをいう男性に対し、楽しそうに「それはないわ〜」 (“No, no~.”) と受け答える。

#### バンクーバー・ソルトスプリング島シリーズ (2017年放送)

- 「英語を話して、その国の暮らしとか文化にじかに触れること。それがほんと、楽しいんです」という石原氏の音声。
- 湾沿いのサンドイッチスタンドで買い物をし、白人男性の店員と短く会話をする。
- 湾を眺める白人のカップルに声を掛け、島への行き方を聞く。
- 島で「スローライフ」を送る白人夫婦宅を訪れ、予約をしている石原だと自己紹介する。
- 地元の料理を習いたいという石原と家の女性が外を散策。何を作りたいのか、何がいいのかなどやりとりの後、地元産ラズベリーを使ったトライフルを作ることを提案される。そのお菓子は大好きだと応じ、二人でマーケットへ向かう。石原氏が若い白人女性店員に話しかけ、お菓子に最適なラズベリーを手際よく購入する。キッチンに場面が切り替わり、スポンジ作りが得意だという石原氏は女性にアドバイスをもらいながら無事に作り終える。
- 毎朝の散歩を日課とするという家の男性と一緒に静かな森林の中を歩く。“It's so quiet. (I take a walk through the woods every morning. It's very refreshing) . It does sound nice.”

#### シドニーシリーズ (2018年放送)

- 郊外らしき場所でスマホ片手に目的地を探す石原氏。通りがかった中高年の白人カップルにスマホを見せながら場所を尋ねる。行先近くまで3人で楽しそうに雑談しながら歩く。
- カフェ店内に座り、何かを読んでいる石原氏。隣のテーブルの白人女性2名のうちひとりが石原氏に「ステキなブレスレットをしていますね」と声を掛ける。「このあたりで買ったの」と嬉しそうに応じて会話が弾む。白人女性のスマホで記念写真を撮りつつ盛り上がる。
- 広い邸宅に知り合いとして招かれたらしい石原氏。入口でホストや他のゲストたちとハグをするなど親しげに挨拶する。広く美しい庭にはテーブルクロスと花がセッティングされたテーブルが並び、カジュアルな服装の楽しそうな白人男女10数名と石原氏が映し出される。集合写真らしきシーンという設定のもと、庭で真ん中に立った石原氏が両側や後方に立つ白人たちに向かって、“Ready, everyone?”と声を掛ける。若い白人女性と肩を抱き合った石原氏が日本語で手を振りながら楽しそうに叫ぶ:「英語を話せるようになって、これまでは考えられなかったステキな出会いがたくさん広がりました〜」。周囲の白人たちも大きな笑顔

で一斉に画面に向かって手を振る。

非白人系の割合が非常に高い街（ニューヨーク、バンクーバー、シドニー）で撮影しつつ、石原氏の会話の相手はすべて白人であり、背景に映る地元住民役たちも全員白人である。CMから排除されているのは非白人が映った広告看板、エスニックレストラン、英語以外の標識なども含まれている。なお、唯一の例外は2015年ロスアンゼルス版に短く登場する年配の黒人男性（タクシードライバー）と最新ロスアンゼルス版（2019年）にやはり短く登場する若い黒人男性（通行人）であるが、いずれにおいてもアジア系住民や彼らとの会話は含まれていない。

CMだけを見ると反・多文化主義のようにさえ見えるが、石原氏が2013年から受けているイーオンでの個人レッスンのトレーナーはその写真とファーストネームから分かるように多国籍である。男女の白人トレーナーに加え、日本人男女複数やアジア系男性も頻繁にレッスンを担当しており、2015年5月にはアフリカ系女性トレーナーも担当している。レッスン開始直後の2013年7月に石原氏は「日本人の先生の英語が素敵！日本人でもあんなにカッコよく話せるんだ。。わたしもがんばる！」と書き込んでいる。最近のレッスン動画（2018年6月）でも、2015年3月より指導を受けている日本人男性トレーナーから英語オンリーのレッスンを受けている。「ネイティブ外国人講師」を売りにする英会話学校や教育機関が多い中で、多様なトレーナーによるレッスンとその公表は評価できるが、同社のCMシリーズとの対比が顕著である。

ではなぜ石原氏が演じる若い日本人女性にとって「ステキな出会い」の相手は白人英語ネイティブ話者でなければならない、と想定されるのか。なぜ「英語を（白人と）話して、その国の（白人たちの）暮らしとか文化にじかに触れること」が若い日本人女性にとっての英語学習の目標である、と想定されるのか。まずひとつには、第二論文や本稿の後半で指摘するように、欧米人研究者だけではなく日本人男性の間でもオリエンタリズム由来の「日本人女性は欧米・白人好き」という認識があるからだといえよう。

さらに、職場では「英語をいかした仕事」を与えられることはない（と想定された）若い社会人女性たちを対象としたCMなのであるから、彼女たちが職場以外で英語を使って輝くことが出来る方法を提案しなければならない。ただし「じゃあ、日本を捨てて欧米に移住しましょう」というメッセージはさすがに全国ネットでは流せない。だからこそ、石原氏が演じる旅慣れた女性は現地でゆったりと海外一人旅を過ごしつつ（“traveling by yourself”，バンクーバーCMシリーズ内）、現地の白人たちとの「ステキな出会い」という思い出を作ったあとは、日本での日常生活に文句も言わずに戻っていくのである。

### 「英語で輝きたい女性たち」：男性優位社会で期待されないという自由

「児童英語教師」CMと「海外で英会話をして輝く女性」のCMから分かるように、「英語が好き」な社会人女性たちが輝ける場所は男性優位の職場の外、である。だからこそ、「英語をいかした職業」に就きたいという女子高校生たちのモデルとなるようなビジネスウーマンは日本の小説、ドラマ、CMのいずれにも登場しない。例外らしき例は仮想空間の中だけである：眼鏡と英字新聞を手にキャリアウーマンらしくポーズを決めるファッション雑誌モデルか（Kobayashi, 2015）、上司役が似合う元宝塚歌劇団男役トップスター・天海祐希氏が登場するイーオン「英語から逃げない」CM編（2015年放送）程度であろう。天海祐希氏の登場するCMを以下で紹介するが、天海氏はイーオンのCM以外にもサントリーのチューハイ（-196℃ストロングゼロ）CMシリーズで男性部下たちに囲まれる「会社上司」役を演じている：

1. 若い男性社員が海外のクライアントからの英語の電話がわからず、「切っちゃお」と、受話器を置きかける。その横に上司の天海祐希氏が登場し、「待って。英語から逃げちゃだめ。」と制止する。そして部下に顔を近づけて一言：「行ってるんでしょ、イーオン。」
2. 画面がイーオンでのマンツーマンらしき個室に変わり、その男性社員に対して白人男性教師が親指を立て“Good”のジェスチャーをしている。
3. 再度画面がオフィスに切り替わり、その男性社員が問題なく英語での電話対応をしていたあと、“Sure. Hold on, please.”「上司に代われと。」と、受話器を天海氏に渡そうとする。
4. 天海氏は腕組みをし、力強く一言：「よし！いないって言って。」その言葉に周囲の社員たちは椅子から落ちそうになりそうになるなどズッコケる。
5. 画面は替わり、天海氏がイーオンの前に立ち、その看板を見上げたところで、「あなたの英語上達パートナー。イーオン」という音声流れる。天海氏が大きくうなづきCM終了。

「英語をいかしたい」と思っている日本人女性たちを長期的なグローバル人材としてみならず職場はほとんどない。そしてそうした社会人女性たちは通訳・翻訳業、海外転職、外資系企業への転職、こども英語教室開設、プチ海外旅行など、男性優位の職場の外か端での英語との付き合い方に目を向けるよう誘導される。しかしこうした見方は浸透しておらず、一般的に、そして海外研究者たちの間では、日本人女性たち自身が英語との楽しい付き合い方を職場の外で求めているのだ、と理解している。以下で筆者が東京でインタビューした39歳の男性社員の語りの一部を紹介したい (Kobayashi, 2012, 2018b) :

女性の場合は、「私辞めるわ」って辞めて。「じゃあどこいくの」って、「ちょっと海外留学〜」とか。そういうの、あるじゃないですか。帰ってきたらパートでも働けるし。差別みたいになっちゃいますが、「派遣でいいや〜」みたいな。そういうの、できないわけじゃないじゃないですか、女性の場合は。男性の場合はね、そんな時代じゃなかったですからね。正社員で働いて、家族を養わなきゃいけない、っていうのが。辞めちゃったら、「え、お前大丈夫か」ってなりますよね。(インタビュー後半) 男はそうはいかないですからね。就職しないと。「なんだよおまえ、正社員じゃないのかよ」みたいな目で見られちゃいますからね。社会的なあれもあるんじゃないですかね。

この男性を紹介してくれたのは彼が30代前半で帰国した後もずっと連絡を取り合っているというカナダの大規模英語学校の責任者たちであった。男性は都内の大学法学部卒業後、旅行会社に就職し海外添乗員なども経験していたが、28歳の頃に初めて留学をしたくなる。ただ長期休暇などをとれるような「そんないい企業は日本にはない」ため、会社を辞めるか諦めるか「どっちかしかない」状態となる。周囲からは「(留学なんて) やめなよ」「なんで行くの?」「どうしていくの?」と止められたが、「チャンスは自分でつかみなさい、というのが僕の考え」という男性は1996年から1999年までカナダの語学学校で勉強する。なお、カナダではOLを辞めてきたという20代の日本人女性が多かったという。その後アメリカの大学学部会計学入学を果たすが、「お金」の問題から32歳で途中帰国。「いったん帰ってきちゃえば、もう行けないですね」という状況になり、東京で再就職する。英語の必要のない職場にも慣れ、英語を忘れた、という時期に筆者が東京でインタビューを行った。なお、上記の内容について男性はインタビュー中の前半と後半で2回繰り返すように語っていた。

女性たちは男性と同じ仕事をするを期待されないがゆえに、その職場を離れるという「自由」を手に入れることができる、という見方は男性性研究者の間では共有されている (Connell, 2005)。ただし主要人材としてみなされないから与えられるその「自由」を彼女たち自身が欲しているわけではない。しかし、上記の男性の語りからわかるように、男性は大変だが女性は社会的制約がなく楽、という理解は男性たちの間で根強い。さらに、第二論文 (小林2018) で指摘したように、国内外、特に欧米人研究者たちの間は、「英語が好き」な日本人女性が多い理由として「日本人女性たちの欧米・英語へのあこがれ」がある、というオリエンタリズム的な理解が根強い。そしてこうした見方は日本人男性の間にも根付いている。久保田 (2015) が中規模地方都市にて行ったフィールド調査の対象者のひとり、小規模な英会話学校を経営する53歳の日本人男性は次のように語っている (109ページ)：

この業界は変な業界でね。やっぱりね若干ホストクラブ的な面があるんですよ。全然英語上達しないで、何年も続けてくれる20代後半の生徒が結構多いんですよ。やっぱりね、独身の子。(中略) まあ外国人のそこそこ若い男性がいるのが楽しんじゃないかな。ほかに考えられないでしょ。(中略) 日本人の白人に対するコンプレックスまたはあこがれがあるんでしょね。私はないですけどね。

日本人女性たちが求めるまでもなく、白人英語ネイティブ男性たちのほうから自主的に日本にやって来て、英会話講師として働いているにも関わらず、この点に注目した議論はこれまでなかった。また日本人女性たちが熱心に参加する欧米英語圏語学留学やオンライン英会話サービスにおいては白人女性とフィリピン人女性たちが担当教師であることが圧倒的に多いが、こうした矛盾—つまり教師が白人男性でなくても彼女たちには何ら問題ない—についてこれまで議論されたことはなかった。相変わらず根強い見方は、日本人女性たちが英語学習に熱心なのは「白人男性たちへのakogare」が理由だというものであり、その見方は欧米社会だけではなく (Bailey, 2007; Kelsky, 2001)、日本人男性たちの間でも根強い。

次節では最新の知見を踏まえつつ、「欧米白人男性・社会にあこがれる日本人女性たち自身が楽しい英語とのつきあいを求めている」という根強い見方が今後変化していく可能性があるのかどうか考察する。

### 「日本の白人男性英語ネイティブ教師」研究

「日本にてネイティブ英語教師として働く白人男性」に関する研究はまだ限られているが、研究対象と研究テーマ別に以下の5つに分類できる：

1. 白人英語ネイティブ男性にあこがれる日本人女性へのインタビュー研究 (Kelsky, 2001)
2. 日本人女性が白人男性に抱くあこがれについて語る白人男性へのインタビュー研究 (Bailey, 2006, 2007)
3. 白人英語ネイティブ男性へあこがれを抱く日本人女性を批判する日本人男性の語り (Kobayashi, 2018b; Kubota, 2011)
4. 「ガイジン」「エイカイワ」講師に対する日本人の偏見を批判する白人男性による研究 (Rivers, 2013)
5. 男性優位社会の日本における白人英語ネイティブ男性の優位性、そして彼らによる白人女

性（同僚）や日本人女性（生徒）に対する性差別行為を批判する白人女性による研究（Appleby, 2016; Hayes, 2013; Hicks, 2013）

上記のうち1から3は、「日本人女性が英語・西洋・白人男性に抱くakogare」という見方に沿った研究テーマである。この、白人男性に惹かれる（という）日本人女性に焦点を当てる研究傾向は未だに続いている。しかし近年少しずつであるが、白人男性に焦点を当てた5のタイプの研究が発表されるようになったことは特筆に値する（Appleby, 2014; Hayes, 2013; Hicks, 2013; Kobayashi, 2014）。なお上海（Farrer, 2010; Stanley, 2013）や台湾（Lan, 2011）など日本以外の東アジア圏で働く白人男性英語教師たちに対しても研究が行われ、結果が発表されている。

以下からは、日本人女性たち自身が白人男性をネイティブ英語教師として望んでいる、という認識を問い直す結果を提示している最近の研究成果を概観する。なお、以下に紹介するインタビューデータの和訳はすべて筆者による。

### 給料の良い「英語ネイティブ」職を簡単に与えてくれるアジア

日本の英会話学校や大学までの教育機関で英語講師として働いている白人男性の来日動機だが、自国で大学を卒業しても希望通りの就職ができなかったため日本に来ることにした場合が多い。ではなぜ日本を選んだのかというと、若い白人英語ネイティブであれば東アジアでは簡単に「英語講師」になれる上に、特に日本では給料や待遇が格段に良いというネット情報が出回っているからである（Braine, 2010）。たいていの場合、彼らは日本という国に興味があったわけではないため、来日当初は日本語を話せず、日本滞在期間が長引いてもなかなか本気で日本語を勉強しない。以下に紹介するように、同じような結果が韓国に滞在する白人英語教師たちに対する調査からも報告されている。

韓国で英語ネイティブ教師として働く14名への調査結果（Gearing & Roger, 2018）によると、韓国人女性と結婚またはパートナー関係にある男性が多いにも関わらず、参加者2名を除くほとんどが全く韓国語学習をしていない。その理由として（1）韓国のポップカルチャー（TV番組、K-pop、映画）に「否定的」な印象・嫌悪感や文化的距離感を感じることに、（2）韓国に長く滞在するつもりはないこと、の2点を挙げている。一方、韓国語をしゃべれるまでになった2名はいずれも韓国人女性と結婚し、大学の常勤職にあり、そのうち一人は「一流大学」で働き、韓国が「ホーム」である。最も高い韓国語力を有するその男性は今でも韓国語学習を続けるが、その「個人的」理由が「このバカげた言語の打倒」だと述べている（p. 165 “...and then I can beat this stupid language”）。

対照的な結果を報告しているのが、スペイン・バルセロナで働く白人英語ネイティブ11名を対象としたインタビュー調査（Codó, 2018）である。その大多数がバルセロナという都市と生活スタイルに惹かれたためにこの街にやってきており、長期滞在することを決めている。そのうちひとりの白人男性は最初の滞在国であった韓国は文化的にあまりに距離感がありすぎて馴染めなかった、と語っている。

関連するが、2017年で31年目を迎えたJETプログラムに応募し「公立中・高等学校において外国語指導の補助等を行う「外国語指導助手」（ALT）」として働くという選択肢は英語ネイティブの若者の間での認知度は高い。なお、今では韓国、中国、香港、台湾なども似たようなプログラムを始め、欧米圏出身の英語ネイティブの若者にとって選択肢が増えている。JETプログラムの待遇は非常に良く、英語圏出身の大学卒であれば最高で5年間滞在でき、毎年336

万, 360万, 390万, 396万, 396万円の報酬が保証されている (JETプログラムホームページ, 2018年9月)。母国で就職浪人している若者にとっては夢のような話である。このプログラムのおかげで学生ローンの支払いや大学院入学資金の確保が出来た若者は相当な数になるはずである (類例として, 日本滞在中大学院生として英会話学校複数校勤務により十分以上の貯蓄をしたというプリンストン大学のアメリカ人研究者の語り, McVeigh, 2003)。

### 白人男性としての魅力と自信を与えてくれるアジア

ではなぜ自国に多数存在する第二言語としての英語学校で働かずに, 興味があるわけでもない異国の英会話学校で働くことにするのか。その理由は以下に紹介するように, 自国で白人女性たちばかりの職場に入ることは白人男性として抵抗があるため, 海外を選ぶのだという。教室に座っている生徒たちのほとんどがアジア人学生たちである点と同じであるにも関わらず, 欧米英語圏ではネイティブ英語教師のほとんどが白人女性で, アジアでは白人男性である, というこの顕著な違いに注目する研究者はこれまでほとんどいなかった (Kobayashi, 2014)。なお, この逆転現象はどの「ネイティブ教師」市場でもいえるわけではなく, 例えば「日本語ネイティブの日本語教師」として働く日本人は日本でも海外でも女性たちが圧倒的に多い。

さらに, アジアで「白人英語ネイティブ教師」として働く彼らの多くが自国ではいわゆる「オタク」で「ダサイ」(‘nerd’ ‘geek’ ‘loser’) 男性たちであり, 「若い白人男性」というだけで日本ではイケメンとしてもてるという予備知識を頼りに東アジアにやってくるのだという。この「白人男性というだけでもてる」という情報は白人男性の間で一般常識として出回っているようである<sup>1)</sup>。こうして, 自国では就職にも恋愛にもうまくいかず自分に自信もてなかった彼らであったが, 期待通りまたはそれ以上に東アジア人女性の間でもてはやされる, という経験が何度も出来るため, 自分に自信を持つことが出来るらしい。

Rob・30歳・英会話学校講師 (Appleby 2014 p.79)

以前とは全く違う人間になりました。以前は無口で内気で引っ込み思案だったのですが, ある意味で突然エンターテイナーのように会話のやりとりが上手になったのです。

Cal・20歳・英会話学校講師—その後ALT (Appleby 2014 p.81)

アメリカよりも日本にいるほうがロマンチックな男女関係の場面でうまくやりやすいです。それはたしかです。アメリカではガールフレンドを見つけるのはもっと大変です。女性からの要求度が高いですから。アメリカ人女性の前では緊張して汗がでますよ。関係を維持するにはもっとお金がかかりますし。[中略] 僕はハンサムじゃありませんし, 容姿は平均レベルなんです。マッチョ系でもないです。ブラッド・ピットのような容姿も持ち合わせていないし。[中略]でもアメリカにいた時に比べると日本ではもっと頻繁にセックス相手に恵まれています。

Ryan・27歳・台湾で英語講師—その後上海の大学で英語講師 (Stanley 2013 pp.170-171)

カナダにいた時はかなり使えない男でした。身のこなしとか何においても。でも日本に来て

1) 英語論文の中で必ず引用されるのがそうした男性が主人公となっているCharisma Manというマンガである。白人男性たちによる作品で, 容姿も性格もさえない白人男性が日本に来たとたん, 金髪と青い目というだけでカリスマ性のあるヒーローとしてもてまくなってしまふ, という内容である。1998年以降日本在住の「ガイジン」向けの雑誌に掲載され始めたとたん大いに話題となり, 2002年, 2010年には初版本と続編が出版されている。

から、おかげで以前にはなかった自信を感じることができるようになりました。

上記Ryan (Stanley 2013 pp.218)

同僚のオーリーは母国ではダサイ負け犬で、ここでも相変わらずそうだけど、でも上海では彼は違った風に見られるのです。ここでは国際人と外国人とが見られるから、彼の自己意識も変わりました。

### 男性には居心地がいいアジア

男性優位社会の日本では英会話学校経営者や大学の人事担当者はほとんどの場合で日本人男性たちであり、彼らは白人女性よりも白人男性を好んで採用するのだという<sup>2)</sup>。また長年形成されてきた白人男性たちの英語教育職ネットワークが盤石なため、新参者の白人男性でもそのツテを使って簡単に英語講師職の内輪情報を得たり、推薦状を書いてもらったりすることができてしまう。以下のインタビューデータの中にあるように、JALT (全国語学教育学会) の正会員のほとんどは日本の大学勤務の英語ネイティブ教師であり、その7割、8割以上が白人男性である。筆者も公表されていた年次大会 (2012年) の発表者リストをデータとして分類してみたことがあるが、243名の第一発表者のうち、日本の大学所属の欧米系男性は206名 (84.8%) で、欧米系女性37名を大きく上回っていた。同じ年のカナダの英語教育年次大会 (TESL Canada) で同じようなデータ分類をしてみたところ、結果は対照的で、151名の発表者のうち、カナダの大学所属の欧米系女性115名 (76%) で男性36名 (24%) であった (Kobayashi, 2014)。

Grant・40歳・英会話学校勤務—その後大学講師 (Appleby 2014 p.142)

JALTの会議や学会では70%の参加者は白人男性たちです。そういう彼らは非常勤英語講師たち御用達のバーなんかには仕事のあとみんなで飲みに行くのですが、そこでビール片手に大学公募とかいろいろな話題が出るわけです。そういう場所には白人女性はいないので、彼女たちはそういった情報を知る由がないのです。だからネットワークというのは相当重要なわけです。

Tim・50歳・専門学校勤務—その後大学講師 (Appleby 2014 p.110)

仮に、ですが、もし私が日本の大学の公募に応募して、競争相手が私と同じ国出身で全く同じ学歴・資格をもつ白人女性だったとしたら、日本の大学の採用者は私を採用するでしょうね。彼らに言わせれば、男性のほうが役目を果たしてくれる可能性が高いわけです。つまり会議の時間も含めて一日16時間職場にいることができるので。男性なら家庭の事情があるとかいって急いで帰宅することがないですからね。

Andy・40歳・英会話学校—その後ALT—大学講師 (Appleby 2014 pp.139-140)

白人男性なら日本人男性から飲み誘われる可能性は高くなると思います。相手が白人女性なら彼らはもっと躊躇するでしょう。私はあちこちの会社でバイトとして英語を教えて小遣い

2) *Charisma Man*の4コマ漫画の中でも日本人男性たちが持つ白人男性志向が描かれている。優等な成績で大学や大学院を卒業したキャリアウーマンらしい白人女性たちは学歴を褒められながらも何故か採用されず、代わりにハンバーガー店で働き夜間学校ではく製術を学んだという白人男性は「明日から働いてもらえないか」と即座に採用されてしまう。その様子を目の前にした白人女性2名が口を開けて啞然としている様子がオチとなっている。

を稼いでいたのですけど、会社に行ってそこの社員たちに英語を教えれば、彼らはアルコールや夕食の席に連れ出してくれるんです。社交ですね。それで、はっきりとは言いませんが、彼らは白人男性のほうがいいんです。実際いつも雇っているのは白人男性です。彼らだって男性、日本人男性ですから。日本人女性とか白人女性とはそういう社交はしたがるらないようです。男性同士のことにしておきたいようでした。

東アジア社会において優位性が与えられる白人男性とは対照的に、白人女性たちが日本人男性と白人男性から雇用情報や信頼を得ることは難しい。こうした研究が発表される前は、東アジアで英語教師として働く白人女性が少ないのは彼らが日本人男性から相手にされないからだ、という言説が当然のように語られ、その傾向は未だに根強い。そしてこの言説とセットで語られるのが、アジア圏で英語教師として働く白人男性が多いのは彼らに憧れる現地女性が多いからだ、というものである。しかし近年の研究が明らかにしているように、自国で人気も自信もなかった白人男性たちは苦手意識のある白人女性を敬遠するだろうし、白人女性たちのほうも自国で相手にしなかった「オタク」の白人男性たちにあえて近づこうとしないのだろう。結果として彼女たちは予定を切り上げてでも東アジアを離れ帰国していくケースが珍しくない(Cho, 2012)。

### 長く滞在しすぎると抜け出せないアジア

ところでここまでの研究成果を見ると、自国では職も自信も恋愛もなかった英語ネイティブ白人男性たちが日本に来たとたん全てを簡単に手に入れ幸せな人生を送っているかのように見えるが、そうすべてがうまくいっているわけではない、ということも研究は明らかにしている。まず彼らには女性的で専門職とはいえない職に就いていることに対する恥ずかしさがある。

Steven・45歳・大学での英語講師 (P.-C. Lan 2011 p.1688)

*Real*という言葉を使いますが、自分が*real*という感じがしないのです。実在する*real*な人間でない、というか。[十分に周りから認められていない、ということですか?]十分に男らしくないということです。ここ台湾で男性らしくいられないのです。英語教師という職業は女性がするものです。実際、私が雇われている理由は私が英語のネイティブスピーカーで白人だからですけど、カナダに帰ればそんなことは何の意味もないんですよ！

母国に戻り就職しようにも、アジアでの英語講師という職歴が有利に働くわけではないし、白人女性ばかりの英語教育職に就職することにも抵抗がある(だからアジアという海外で英語教師をする道を選んだのである)。そのため、日本などで英語教師として働き続けざるを得ないこととなる。実際、近年の研究調査参加者たちの履歴を見ると、複数の非英語圏を転々としているという白人男性が非常に多い。結局日本で働き続けるしかない多くの白人男性たちは「男性」としての自尊心を高めてくれる社会的地位を確保するため、大学、特に学部での「英会話講師」ではない常勤専門職を最終目標とする。そのために必要条件とされる日本語力を磨きつつ、欧米の通信プログラムを利用して修士号(MA)と博士号(Ph.D.)の修得を目指す。

Cal・20歳・英会話学校勤務—その後ALT (Appleby 2014 p.92)

ある意味、私は罫にはまった囚われの身です。貧困ライン以上の生活をするためには十分な

収入が必要で、大学院資金の貯金もしたいですが、アメリカに戻ってしまえば生活費に見合う職が見つからないのです。アジアで暮らしたという経歴を除けば、アジア研究の学位があったってどうにもならない。唯一最善の道は（日本で）英語教師になることなんです。

白人女性Karen・イギリスの語学学校勤務—その後上海の大学講師（Stanley 2013 p.180）

彼ら白人男性たちにとって欧米への帰国という選択は麻薬をやめるように大変なものです。上海にいれば（地元女性たちから）常時注目を得られますけど、帰国すればそんなスーパーマン的存在からくず同様に無価値な人になってしまうわけですから。

### 長く働き続けるネイティブを歓迎しないアジア

「若い女性」の商品価値が高いアジアでは、「若いガイジン」も同じ扱いを受ける。そのため、英会話産業で不安定な職に従事する白人男性たちの間では老いに対する不安が強く、解雇されない大学常勤職に就くことを第一目標とするのだという。なお、日本やアジアの大学で定年退職した白人男性たちの数は相当の数になるだろうが、彼らが退職後どこでどのような人生を送っているのかについては研究が全くされていない。

Ben・40歳・英会話学校勤務—その後ALT（Appleby 2014 p.93）

（英会話講師職は）キャリアと呼べるようなものなんかありません。日本ではキャリアではなくて仕事です。雇い主も長く勤め続けることを期待していませんし、長くいてもらいたくないのです。（白人英語教師は）目新しいから価値のある存在ですから。

Benjamin・大学英語センター講師（Rivers 2013 pp.77-78）

雇用期限を設けることで、大学は英語センターの（英語ネイティブ）スタッフたちの年齢を低く抑えておきたいのです。ビジネスとして、彼らの若々しい顔を学生たちにアピールできますからね。

### 白人男性と地元女性を結び付けたがるアジア

大学を含め、日本の英語ネイティブ教師市場で白人男性を雇っているのは日本人女性たちではなく、地元の男性たちである。以下の白人男性も気づいているように、白人男性と日本人女性という定番ペアを「英会話教室」という空間の中で作り上げているのは日本人男性たちであり、日本人女性ではない。しかしながら、こうした事実は日本人男性からも欧米人研究者からも認められず、日本の女子大学生やOLたちが仕事で英語を使うわけでもないのに英会話学校に通ったり、欧米に行きたがるのは白人英語ネイティブ男性たちにあこがれているからだ、という語りが続いていく。

Brad・30歳・ALT—その後企業向け英語講師—大学講師（Appleby 2014 p.126）

往々にして白人男性と日本人女性というペア設定は大学側によって意図的に作り上げられているのです。その男女間交流と言語学習効果にはなんの教育上の関係性がないにも関わらず、です。でもスーツを着た白人男性が魅力的な若いアジア人女子学生と楽しそうに会話をしているというイメージは広報パンフレットなどを通じて授業宣伝のために広く使われています。

## おわりに

第二論文(小林2018, 45-46ページ)で指摘したことをここで繰り返したい:

本当に白人男性目当ての日本人女性たちが多ければ、日本中のオンラインやリアル英会話学校で働く講師の多くが白人女性になった時点で日本人女性たちは英会話学習への投資を辞めてしまったり、がっかりする可能性が高い、ということになる。しかし日本の英会話教室にしても、スカイプ画面に映るオンライン英語講師にしても、海外語学学校教師にしても、「ネイティブ講師」が白人女性だったという理由で日本人女性たちが学習を辞めたとか、不満を訴えたなどとは聞いたことがない。

日本では英会話学校でも教育機関でも英語ネイティブ教師として雇用されているのは白人男性ばかりであり、彼ら以外の「英語ネイティブ」教師という選択肢がほとんどない状態である点は無視したまま、そうした環境で自主的に英語を学んでいる女子学生たちは「白人男性へのakogareがあるのだ」とか「日本人男性社会から(一時でも)脱出したいのだ」、という議論だけが continuing (Bailey, 2007; Kelsky, 2001)。欧米・海外の研究者たちにとっては「白人男性に恋い焦がれる」『蝶々夫人』(マダム・バタフライ)に通じるオリエンタル女性像が理解しやすいのかもしれないが、そうした「白人男性好きの日本人女性」という見方が日本人研究者たちにも浸透しきっているところにオリエンタリズムの根深さがある。

こうした日本人女性に焦点をあてた研究傾向は今後も続くと予想される。なぜなら、「日本人女性の英語学習動機の背景には欧米社会や白人男性へのあこがれがある」というオリエンタリズム的な見方は欧米人研究者の間で根強いためである。そして「日本人女性たちは英語・欧米・白人男性好きだから、楽しく遊び感覚で英語を勉強したがるんだ」ということにしておけば、彼女たちをグローバル人材だとかビジネスパーソンだとか扱わなくて済むわけで、男性が支配する日本のビジネス界にとっても都合がいい。非常に皮肉ではあるが、「女性差別の激しい日本社会を嫌がり欧米に憧れ、英語を学ぶ日本人女性」という見方を好む欧米社会と、「日本社会の中で楽しく英語を学んでいる日本人女性」という見方を好む日本の英会話産業やビジネス界のいずれにとっても、日本人女性に焦点をあてた議論は都合がいいし、それぞれの社会の中で「ウケ」がいい。結果として今後とも、日本人女性英語学習者は日本社会でも海外でも既存の社会構造の邪魔にならない空間で輝き、生きていくことを求められ、そしてそうした彼女たちの英語学習姿勢は「英語・白人社会／男性へのあこがれ」として理解され続けていくだろう。

## 参考文献

- Appleby, R. (2014). *Men and Masculinities in Global English Language Teaching*. New York: Palgrave Macmillan.
- Appleby, R. (2016). Researching privilege in language teacher identity. *TESOL Quarterly*, 50 (3), 755-768.
- Bailey, K. (2006). Marketing the *eikaiwa* wonderland: ideology, *akogare*, and gender alterity in English conversation school advertising in Japan. *Environment and Planning D: Society and Space*, 24, 105-130.
- Bailey, K. (2007). *Akogare*, ideology, and 'Charisma Man' mythology: reflections on ethnographic research in English language schools in Japan. *Gender, Place and Culture*, 14 (5), 585-608.
- Braine, G. (2010). *Nonnative Speaker English Teachers: Research, Pedagogy, and Professional Growth*. New York and London: Routledge.
- Cho, J. S. P. (2012). Global fatigue: Transnational markets, linguistic capital, and Korean-American male English teachers in South Korea. *Journal of Sociolinguistics*, 16, 218-237.
- Cho, J. (2017). *English Language Ideologies in Korea: Interpreting the Past and Present*. Cham: Springer.
- Codó, E. (2018). The intersection of global mobility, lifestyle and ELT work: a critical examination of language instructors' trajectories. *Language and Intercultural Communication*, 18 (4), 436-450.
- Connell, R. (2005). *Masculinities* (Second ed.). Berkeley: University of California Press.
- Farrer, J. (2010). A foreign adventurer's paradise? Interracial sexuality and alien sexual capital in reform era Shanghai. *Sexualities*, 13 (1), 69-95.
- Gearing, N., & Roger, P. (2018). 'I'm never going to be part of it': Identity, investment and learning Korean. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 39 (2), 155-168.
- Hayes, B. E. (2013). Hiring criteria for Japanese university English-teaching faculty. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-Speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education*. (pp. 132-146). Bristol: Multilingual Matters.
- Hicks, S. K. (2013). On the (out) skirts of TESOL networks of homophily: Substantive citizenship in Japan. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education* (pp. 147-158). Bristol: Multilingual Matters.
- Kelsky, K. (2001). *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams*. Durham: Duke University Press.
- Kobayashi, Y. (2002). The role of gender in foreign language learning attitudes: Japanese female students' attitudes towards English learning. *Gender and Education*, 14 (2), 181-197.
- Kobayashi, Y. (2011). Global Englishes and the discourse on Japaneseness. *Journal of Intercultural Studies*, 32 (1), 1-14.
- Kobayashi, Y. (2012). Working adults' (un) willingness to study L2: preliminary findings and research issues. In H. Pilay & M. Yeo (Eds.), *Teaching Language to Learners of Different Age Groups (Anthology Series 53)* (pp. 218-227). Singapore: SEAMEO RELC.
- Kobayashi, Y. (2013). Global English capital and the domestic economy: the case of Japan from the 1970s to early 2012. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 34 (1), 1-13.
- Kobayashi, Y. (2014). Gender gap in the EFL classroom in East Asia. *Applied Linguistics*, 35 (2), 219-223.
- Kobayashi, Y. (2015). 'Women's power goes up with language study': Japanese women's magazine construction of ideal female adult learners in gendered Japan. In A. Jule (Ed.), *Shifting Visions: Gender and Discourses* (pp. 138-154). Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Kobayashi, Y. (2018a). Chapter 4: Japanese female students' positive attitudes toward language study. *The Evolution of English Language Learners in Japan: Crossing Japan, the West, and South East Asia* (pp. 45-60). New York: Routledge.
- Kobayashi, Y. (2018b). Chapter 5: Japanese (fe) male learners' (un) motivation in overseas ESL contexts. *The Evolution of English Language Learners in Japan: Crossing Japan, the West, and South East Asia* (pp. 61-79). London and New York: Routledge.
- Kobayashi, Y. (2018c). Chapter 8: Japanese women's magazines' articles about English study: a window on Japanese women's status in the business world. *The Evolution of English Language Learners in Japan: Crossing Japan, the West, and South East Asia* (pp. 116-131). London and New York: Routledge.

- Kubota, R. (2011). Learning a foreign language as leisure and consumption: enjoyment, desire, and the business of *eikaiwa*. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14 (4), 473-488.
- Lan, P.-C. (2011). White privilege, language capital and cultural ghettoisation: Western highskilled migrants in Taiwan. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 37 (10), 1669-1693.
- McVeigh, B. J. (2003). Performing the part of the English teacher: The role of the anthropologist and the anthropologist of roles in Japan. In E. P. Bueno and T. Caesar (eds) : *I Wouldn't Want Anybody to Know: Native English Teaching in Japan*. JPCS Press, pp. 134-46.
- Rivers, D. J. (2013). Institutionalized native-speakerism: Voices of dissent and acts of resistance. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-Speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education* (pp. 75-91). Bristol: Multilingual Matters.
- Said, E. W. (1979). *Orientalism*. New York: Vintage.
- Stanley, P. (2013). *A Critical Ethnography of 'Westerners' Teaching English in China: Shanghai'd in Shanghai*. London and New York: Routledge.
- 久保田 竜子 (2015). グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から— (奥田朋世, Trans.) : くろしお出版.
- 金 静愛 (2008). 韓国における通訳翻訳教育—韓国外国語大学通訳翻訳大学院の場合—. *通訳翻訳教育*, 8, 355-369.
- 篠田 節子 (2000). *女たちのジハード*: 集英社.
- 小林 葉子 (2018a). 小説に登場する「英語(圏)で生きたい日本人女性たち」(1). *岩手大学人文社会科学部紀要*, 102, 85-102.
- 小林 葉子 (2018b). ドラマに登場する「英語で生きたい日本人女性たち」(2). *岩手大学人文社会科学部紀要*, 103, 33-49.
- 清武 英利 (2016). *プライベートバンカー カネ守りと新富裕層*: 講談社.
- 福井 洋平・野村 昌二 (2011). 特集「純ジャパ」の英語術: 「主婦英語」で人生を変える. *アエラ*, 3月14日号.